

<カタログのメモ>

アジアにおける図書館情報学研究交流への期待：NDC および KDC を素材とした研究交流のすすめ

志保田 務
孫 誌 銜

1 NDC10 版の誕生

『日本十進分類法 新訂 10 版』は 2014 年 12 月に日本図書館協会（以下、JLA）から刊行された（以下、日本十進分類法は NDC）。前版、新訂 9 版から 20 年にわたる編集期間を以って生み出された。その特徴、編纂経緯、沿革等は、同書その他を通じて国内関係者に流布されているであろう。

ところが一歩日本を出ると、このことが近隣諸国に知悉されていないことに驚かされる。2015 年 6 月 11-13 日、インド東海岸 SRM 大学で開かれた第 2 回 ICIDL（International Conference on Driven Librarianship）に参加してその感を深くした。

だがそこには当然、逆に自問も出る。わが国で諸外国の国内レベルの外国の分類法をどれほどこなしているか。そういった反省である。

NDC がデューイ十進分類法（DDC）、展開分類法（EC）の影響を基盤的に強く受けていることは良く知られている。ただ、DDC はその後 11 版でファセット方向へ大幅な舵を切っている。NDC のうち続く諸版は、こうした DDC における変移を含め、他の分類表を十分に活用しているだろうか。NDC10 版に至っても、書誌分類の重視など幾多の改良があるが、記号法、補助表などに、外国の分類法がした挑戦を採り入れているか筆者は知らない。

ある分類表の基本構造は無暗に変えてはならないが、国際的議論がほしいと思う。だが、日本国内では、関係ジャーナルにあっても諸国の分類事情に言及したものは多くない。英文誌への投稿も、日本の図書館情報学会全体として少ない。

筆者の本意は、図書館情報学研究の国際化、または国際的研究の連携ということにあるのである。

こうしたなか、日本図書館協会（JLA）の『現代の図書館』（季刊、48 巻 4 号）が 2010 年末に出した「分類新時代」という特集は、優れた企画だった。NDC10 版への道筋が関係委員によって記されるなど、NDC に関してもまとまった経過情報の提供となっている。韓国における分類関係の事情はどうであるか、前述の国際化志向の観点から上述の特集を再読した。

2 KDC、第 5 版まで

この「特集 分類新時代」の中に、『韓国十進分類法』¹⁾という論文がある。NDC を除けば、これは、その特集中、唯一、特定の（十進）分類表を解説した論文であり、歓迎されるものであった。

さて、同論文が言う「現在第 5 版まで発刊されている」という『韓国十進分類法』（以下、KDC）に関する叙述の「現在」は、2010 年 12 月であるが、これが主対象とする第 5 版は 2009

年に刊行であるが、そうした記述が論文の冒頭部にないので多少読みづらい。ただしこれは些細なことに過ぎない。本質的な面で下記の問題点がある。書き留めておきたい。

〔主綱表〕に関しては、「第3版」が第一に表示されている（「別表1 第3版」）。これと対比するかのように、「別表3 第5版」の〔主綱表〕が掲示されている（第4版のそれは省かれている（ちなみに「別表2」は、全版の略史用に使用されている）。第4版を抜いて第3版と第5版を対比する理由は不明だが、それら二つの〔主綱表〕の間に、「KDCの助記法」という中見出しを以って4種の補助表が記されている。この補助表の最初に「形式区分」が座り「(第3版)」との付記がある。続いて「韓国地理区分」、「韓国時代区分」、「国語区分」の補助表3点に来るが、これらには「(〇〇版)」という、属する版を示す付記がない。第5版の時期の論文だから、断りのない場合「第5版」関連と見るべきか。そうだとすると、何故「形式区分」だけ第3版のそれを記したのか。疑問である。あるいは「形式区分」につけられた付記「(第3版)」が、それ以下三つの補助表に対する付記の役割を兼ねるのか。ならばその場合、第5版の紹介（「分類新時代」）として、全体面をどう受け取ればよいのか、補助表だけは「第3版」で解説するのか、理解に苦しむ。

〔主綱表〕で第3版と第5版を並べたのには、KDC 5版（2009年刊）が同4版（1996年刊）の正誤程度に止まるとの見方が伏在し、手元においたであろう最新版5版を直前の4版と比較するのではほとんど意味がないとの判断があったのかもしれない。ただしそうした断りがないので、当方の解釈も類推にならざるをえない。こうした点を含め著者が資料組織研究の専門家と考えにくい。特に「分類する際に必要な目録規則」というような一節を見るとそう感じる。日本内の図書館情報学、資料組織の専門家に韓国の十進分類法に詳しい人を見つけえず、この分野では専門でないが韓国（語）に強い方に無理に御願いしたという事情があったかも知れない。特集編集上の査読も丁寧にすべきであったろう。

だが、上記論文が貴重な記事であることに違いなく、感謝の念は深い。

〔主綱表〕の表示は当然ながら有用である。KDCがNDCよりもDCに忠実であることが明示されている。「歴史」を9類に据え、「宗教」に2類を独立的して与える処置も同様である。ただし言語と文学を隣接の類に置いている点はDCと異なり、この点UDC、NDCに類似するともいえる。自国（韓国）関係を優先させるという点は、他のナショナルレベルの十進分類法と同旨である。

本論文での、第3版、第5版というちぐはぐな対比もKDC上の時代進行を十分示している。特に、「日本」に関する扱いが軽くなる方向性が把握できる。例えば、「神道」は第3版における「26」という独立の〔綱〕から外され「29 その他〔の宗教〕」の下に移動している。同じく「73 日本語」が「73 日本語およびその他のアジア諸語」に、「83 日本文学」が「83 日本文学およびその他のアジア文学」に変わっている。これらは社会的要因があるのだろう。しかしこうした処置はNDCにおける、韓国関係の記号構造レベルが高くない現実に照らして、あり得る処置、興味深い変更と感じる。

3 KDC6 版

2011年9月、Dong-Geun Oh（以下、呉東根）啓明大学校教授が韓国図書館協会（KLA）分類委員会委員長となり、学界と図書館現場の専門家9人を分類委員に委嘱して分類委員会を構成して、改訂作業を進めた。そして、第5版（2009年刊）から約5年後の2013年KDC6版が刊行された。第4版から第5版への改訂に13年を要したのと比べてかなり短期間で改訂が行われた。これは、第5版の訂正と補完をしようとしたことにあった。また初期の版から参照してきたDDCが改訂され、その第23版が2011年に発行された点も考慮された。

本表、相関索引、解説書の3冊、計1719ページという構造である²⁾。

ポイントは次のところにある。重要な点を記しておく³⁾。

- ・主要または近隣国の分類法を参照した。この多様性のゆえKDC第6版を、編集委員長である呉東根は「チゲの分類表」（“チゲ”は韓国の寄せ鍋料理）と譬えた³⁾。
- ・類と綱は、第5版の骨格を可能な限り維持するが、用語を最新化する。特定の主題分野の項目表記はその専門分野の学術用語を積極的に導入する。
- ・助記表、本表内の補助表は一貫して維持する（「助記」との用語を使用している）。
- ・分類記号合成方式を積極的に導入する。
- ・漢字の併記は原則辞め、必要な場合には、これを「（ ）」で付記する。
- ・北朝鮮関連項目を分類表に適切に反映する。
- ・第6版の簡略版と解説書を発刊し、今後KDCベースのシソーラスを編纂する。

この件は以上略々だが、ここではこの範囲にとどめる。理由は次章で記す。

4 おわりに

本稿は、真意においては、図書館情報学における研究の国際的交流を望んで記したものである⁴⁾。特に韓国を採り上げたのは、隣国であり、*Journal of Information Science Theory and Practice (JISTaP)*誌を持ち、図書館関係の英語論文を発表していることを理由としている。また、分類法、特にKDCを採り上げたのは、KDCの第6版が近年発行されたこと。その紹介が日本では十分にされていないと思われることに基づく。KDC第6版について日本の大学図書館の所蔵が確認できなかった。日韓の間には言語、文字的な相違があり、相互に文献を交流することが簡単ではない。また韓国では学術関係の著作権法上の縛りが厳しくなっており、KDC6版の一部あるいは、KLA分類委員会の報告などを安易に和訳することも出来かねる状態である。そこで、*Knowledge Organization*, V.39 (2012), No.4に英語で掲載されたKLA分類委員長・呉東根・啓明大学校教授の論文（*Developing and maintaining a national classification system, experience from Korean Decimal Classification, knowledge Organization, V.39 (2012), No.4, pp72-82.*）を翻訳し、KDCの理解を進めようと図るものである年月的に見れば、同論文は新しくないが、我々にはこれを訳する以外に、上記の目的を達成するための手だてが見つからなかった。

当コラム記事は、上述の翻訳（別掲）を意味づけるための繋ぎの役割を持っている。

注

- 1) 原田美佳「韓国十進分類法 (KDC: Korean Decimal Classification)」(特集・分類新時代)『現代の図書館』vol.48, No.4, 2010, pp253-261
- 2) 志保田務編著『情報資源組織論: よりよい情報アクセスを支える技とシステム』第2版, ミネルヴァ書房, 2016, pp90-91
- 3) 同上
- 4) 2016年1月9日、大阪学院大学を会場に「東アジア地域における書誌コントロールの動向と今後」という国際シンポジウムが開かれたのは、その好例の一つである。
(<http://josoken.digick.jp> 最終参照 2016年10月21日)

(しほた つとむ LASSASPAC 日本支部)
(そん じひょん 大手前大学)